

2008 年
第 20 回八大学 OB 大会

菱

RYOU

目 次

1 . ご挨拶	帯広畜産大 学長	長澤 秀行 1
		1978年卒	
2 . 年度報告		 3
活動報告及び試合結果	帯広畜産大 大会実行委員 大部 善之		... 4
平成 20 年度会計報告	帯広畜産大 大会実行委員 大部 善之		... 6
		1980年卒	
3 . 記念写真 & 参加者名簿		 7
各大学別記念写真			
北海道大学		 8
東北大学		 9
小樽商科大学		 10
東京海洋大学		 11
九州大学		 12
帯広畜産大学		 13
名古屋大学		 14
長崎大学		 15
オーバー 40 , 50		 16
講演会		 17
4 . トピックス		 18
講演会の記録	帯広畜産大学 1980年卒 小林 誠	 19
各大学ラグビー部OB会費の状況	九州大学 1972年卒 久野 哲	 32
5 . 各大学投稿		 34
ノーサイド	北大 1980年卒	野村 文明 35
まんぷくラガーマン誕生秘話	東北大 1999年卒	鍋谷 仁志 37
北海道支部発足について	小樽商大 1970年卒	沢藤 洋一 40
横井さんに学ぶ	小樽商大 1974年卒	木呂子 真彦 42
走る楽しみ	九州大 1972年卒	久野 哲 45
OB会活動と現役支援	帯広畜産大学	緑白クラブ 47
八大学ラグビーのいいところ	名古屋大 2000年卒	壹岐 一也 49
八大学参加10周年を過ごして	長崎大 1970年卒	伊藤 正 51
6 . 編集後記	九州大 1971年卒	丸田 堅次 56

ご挨拶

大会会長 長澤秀行（現学長）
帯広畜産大学 昭和53年卒

昨年の3月末であったでしょうか、2つ下（55年卒）の後輩から突然連絡がありました。卒業以来音沙汰なしの後輩は「4月26日」秩父宮ラグビー場に来てください」というのである。おまけに「開会宣言をしろ」「試合も出ろ」「あなたは幹事校代表者だ」と。生意気な後輩に振り回されたこの一年を振り返えりたいと思います。

さて親善大会ですが、当日は天候にも恵まれ選手、家族を含め例年の約2倍の300名以上が集まりました。また、試合を撮影したビデオ販売も予想を上回る売り上げだったようです。

大会を振り返って印象に残っていることがあります。それはオーバー40・50・60の試合です。15分間の4試合に多くの選手が参加され、途中交代をしなければならないほど盛況でした。

この大会は各校同士の親睦もさることながら、母校のOB同士が親睦を深める貴重なイベントであると感じた次第です。今後も大会の益々の発展を希望します。

年末の講演会について報告します。八大学ラグビーOB会は20周年という記念すべき年ということで、幹事校として誰に講演依頼をするか悩みました。そして実現の可能性はともかく、現日本代表ヘッドコーチのカーワン氏に依頼しました。成せば成るとはいったもので、関係各位のご協力や人脈を通じ



て講演会を開くことができました。講演会場も海洋大OBの紹介で「小山台会館」という立派な会場で行うことができました。参加者は約150名が集まり会場はほぼ満員になりました。



また、講演後の質問も多数いただきなど盛況であったと思います。あとで聞いた話ですが、カーワン氏はこのような講演会は初めてだったそうです。また、本人はこのようなラグビーファンがいることをたいへん喜んでいたそうです。親善大会および講演会に参加頂きました各校の皆様にはこの場を借りて厚くお礼申し上げます。



2008 年度報告

平成 20 年度 八大学ラグビーOB 会活動報告

1 . 八大学ラグビーOB 親善ラグビーダ大会

- (1) 開催日時 平成 20 年 4 月 26 日 (土) 9 : 00 受付開始 ~ 16 : 30 閉会
(2) 開催場所 秩父宮ラグビー場 (天候 曇のち最終試合後半多少降雨)
(3) 参加者 340 名 内訳 OB 295 名 ご家族 45 名
(4) スケジュールと結果 (ゲームは 20 分ハーフ、ただし第 3 試合は 15 分 × 4)

9 : 40 開会式・記念写真撮影
10 : 00 第 1 試合 (20 × 2) 帯広畜産大学 10 - 15 名古屋大学 鈴木 Ref
10 : 50 第 2 試合 (20 × 2) 九州大学 15 - 12 東北大学 河野 Ref
11 : 40 第 3 試合 (15 × 4) 六大学 60 超 10 - 26 海洋 60 超 塩原 Ref
オール帯広 0 - 15 オール海洋 塩原 Ref
六大学混 10 - 0 オール帯広 鈴木 Ref
南地区 10 - 0 北地区 吉村 Ref*
12 : 50 第 4 試合 (20 × 2) 東京海洋大学 38 - 5 長崎大学 河野 Ref
13 : 40 第 5 試合 (20 × 2) 北海道大学 71 - 0 小樽商科大学 塩原 Ref
(*吉村 Ref は海洋 Grp で本人希望で当日担当配分を依頼)
14 : 50 - 16 : 30 懇親会

(5) 開催概要

- ・ 当日は晴天無風の絶好の天候に恵まれました。また、芝のコンディションも鈴木 Ref(日本協会)いわく、日本選手権のときよりも遙かに良好な状態とのことでした。
- ・ レフリーは鈴木氏のほか、河野氏(日本協会)、塩原(関東協会)と吉村氏(海洋大)の 4 名で行われました。怪我人が 3 名出ましたが、適切なレフリングをしていただいたため、いずれも軽症でした。
- ・ 第 3 試合は多くのオーバー 405060 プレーヤーが参加され、15 分間に選手交代をするなどして、全員が試合参加できるよう配慮する必要があるほど盛況でした。
- ・ 試合後の懇親会は秩父宮ラグビー場 2 F のコンコースで行われました。各校とも途中帰宅する方も少なく、多くの方に参加していただきました。各テーブルに配膳された食材は速やかに消費していただきました。
- ・ 今大会は 20 周年という記念すべき大会ということで、秩父宮ラグビー場開催となりましたが、これほど多くの方が参加されるということであれば、3 年から 5 年毎に開催できればと感じた次第です。

2. 年末講演会

- (1) 開催日時 平成20年12月11日(木)
- (2) 開催場所 小山台会館 品川区小山4-11-12
- (3) 参加者 150名 内訳 O B 108名 招待者42名
- (4) スケジュール

17:40	受付開始
18:20	開会挨拶 蒔広畜産大学 長澤学長
18:30	講演会開始 現日本代表ヘッドコーチ ジョン・カーワン
20:00	記念撮影
20:15	懇親会
21:00	閉会
21:30	2次会

(5) 開催概要

・「私のラグビー哲学と日本代表の目指すもの」と題して、カーワン氏は日本代表ヘッドコーチの立場から熱く語って頂きました。講演は通訳を介して行われましたが、両者の呼吸や思いが一致していたためでしょうか、彼の語らいがダイレクトに伝わった講演でした。また、例年は講演後の質問も少ないのですが、司会者を困らせるほど多数の質問を頂きました。

・開催会場は海洋大O Bの紹介で確保して頂きました。会場は駅から近く、プロジェクター付きの立派なホールで、しかも料金は格安でした。また当日は、小山台高校ラグビー部に会場の設営や片付けを手配して頂きました。

・講演後の2次会は駅前の中華料理店で行いました。何度も中締めを行いましたが、カーワン氏・通訳・太田G Mは最後まで参加して頂きました。

《講演者略歴》

ジョン・カーワン (John James Patric Kirwan, 愛称は「JK」)
現日本代表ヘッドコーチ。現役時代のポジションはウイング。1964年12月16日生まれ、ニュージーランド・オークランド出身。19歳6ヶ月でニュージーランド代表オールブラックスデビュー。1984年から1994年まで、オールブラックスに選出される。第1回ワールドカップ優勝にも貢献。キャップ63、35トライ。1997年から3シーズン、NECグリーンロケッツに在籍。引退後はチームアドバイザーに就任。2002年からはイタリア代表監督も務め、2004年のテストマッチでチームを引き連れ来日した。

2007年、日本代表ヘッドコーチに就任。ラグビー殿堂にも名を連ねている。

平成20年度 八大学ラグビーOB会 会計報告

収入	金額	支出	金額	収支
繰越金	476,071			
第20回ラグビー大会				
参加者:295名 × 3,000円	885,000	懇親会	178,149	
DVD :189名 × 1,000円	189,000	試合関係	548,965	
		雑費	58,055	
		DVD製作費	161,549	
小計	1,074,000	小計	946,718	127,282
年末講演会・忘年会				
参加者:110名 × 4,000円	440,000	謝礼/会場費	251,300	
		懇親会	183,378	
		雑費	40,909	
小計	440,000	小計	475,587	-35,587
その他				
利息	1,139			
審判DVD			6,630	
ファイル			945	
小計	1,139	小計	7,575	
合計	1,991,210		1,429,880	561,330

本件は2月12日開催の幹事会に報告の上、各大学幹事により承認を頂きました。

大部 善之(幹事校 帯広畜産大学 S55卒)

伊藤 正(医療大) 2009/02/12


記念写真

北海道大学



参加者名簿

卒年	氏名	卒年	氏名	卒年	氏名
S 5 1	近藤 芳正	H 0 5	今井 淑満	H 1 2	木村 学
S 5 3	島田 章則	H 0 6	斎藤 隆	H 1 3	樋口 勝恒
S 5 5	野村 文明	H 0 7	蓑内 真吾	H 1 3	西川 隆史
S 5 5	川端 亮二	H 0 7	山口 博史	H 1 5	甲斐野 俊也
S 5 7	阿部 修司	H 0 8	磯野 哲郎	H 1 6	柏木 陽
S 6 0	斎藤 直樹	H 0 8	村田 還	H 1 6	月里見 雅己
S 6 0	森 俊之	H 0 9	横内 稔充	H 1 9	福田 駿
S 6 2	青柳 秀夫	H 1 1	大村 博司	H 1 9	藤井 崇玄
H 0 2	南 隆太	H 1 1	田中 央吾	H 1 9	山岸 啓輔
H 0 5	木村 欣晃	H 1 2	佐藤 正典		



参加者名簿

卒年	氏名	卒年	氏名	卒年	氏名
S 3 7	赤津 光治	H 6	恩田 陽介	H 1 3	黒澤 辰昭
S 3 7	山本 真一	H 6	笠三 広介	H 1 4	早川 弘治
S 4 8	海野 晴夫	H 7	山田 裕介	H 1 4	吉田 健淳
S 4 8	薬袋 啓一	H 8	中村 孝也	H 1 5	大井 淳博
S 5 1	田中 直一	H 8	白井 昌貴		古川 貴稔
S 6 0	安部 淳一	H 9	後藤 聰		
S 6 2	古郡 徹	H 9	藤川 英範		
S 6 2	北島 知樹	H 1 0	及川 健介		
H 1	貫井 孝治	H 1 1	喜原 寛之		
H 3	坂巻 士朗	H 1 1	鍋谷 仁志		

小樽商科大学



参加者名簿

卒年	氏名	卒年	氏名	卒年	氏名
S 3 5	半田 次郎	S 5 6	樺沢 典史	H 0 7	小林 義典
S 4 2	河路 龍男	S 5 7	藤江 雅彦	H 0 8	田中 剛
S 4 2	酒井 克臣	S 5 7	高崎 明	H 1 3	宮川 修
S 4 3	佐藤 紘司	S 5 7	市原 昭一	H 1 6	田中 雄三
S 4 4	海老沼 俊昭	S 5 9	海野 格	H 1 6	斎藤 隼人
S 4 4	倉田 正敏	S 5 9	出村 泰人	H 1 8	山田 晃裕
S 4 4	滑川 正昭	H 0 1	土橋 真人		
S 4 6	佐藤 貞直	H 0 1	成田 英哉		
S 4 9	中島 文雄	H 0 5	佐々木 啓		
S 4 9	木呂子 真彦	H 0 7	伊藤 太二郎		

東京海洋大学



参加者名簿

卒年	氏名	卒年	氏名	卒年	氏名
S 3 0	元山 泰秀	S 4 7	加藤 喜男	H 1	新井 裕也
S 4 0	清水 宇門	S 4 8	岡田 恭一	H 1	田中 達也
S 4 0	谷 文彦	S 4 8	川島 康夫	H 1	大星 索道
S 4 0	大野 泰介	S 4 9	中川 利夫	H 3	指田 琢雄
S 4 2	中村 守	S 5 2	上井 正彦	H 3	工藤 紀和
S 4 2	松井 都四郎	S 5 3	吉永 辰雄	H 9	手塚 大介
S 4 3	石川 泰久	S 5 3	中村 渡	H 1 1	田中 正樹
S 4 3	串田 登志雄	S 5 6	内大	H 1 2	蓮見 大介
S 4 4	山田 穂	S 5 7	角田 明	H 1 7	前角屋 正藏
S 4 4	小多 智之	S 5 8	菅 晃	H 1 7	屋和泉 人晴
S 4 5	藤原 成一	S 5 8	木村 豊	H 1 7	圭紀
S 4 5	刑部 修	S 5 8	有馬 博	H 1 7	佐木 洋介
S 4 6	濱武 和男	S 6 1	大田 昭	H 1 8	寿木 寿海
S 4 7	後藤 憲幸	S 6 3	黒留 晴彦	H 1 9	太田 雄樹
S 4 7	吉村 秀清	H 1	鶴留 洋一		



参加者名簿

卒年	氏名	卒年	氏名	卒年	氏名
S 4 0	新田 武明	S 6 0	洞 尚文	H 2 0	伊地知 彬人
S 4 1	清水 紘行	S 6 2	東田 外史	応援	西谷 智史
S 4 5	中村 恒美	H 6	牛塚 耕治	応援	興梠 慎亮
S 4 5	石井 三郎	H 8	大野 克哉	応援	北住 邦夫
S 4 7	久野 哲	H 1 0	武知 正文	応援	布施 二和
S 4 7	久我 秀昭	H 1 0	牛丸 晋	応援	松野 雄和
S 4 7	松岡 繁	H 1 1	竹本 寿久	応援	田臥 康
S 5 7	国武 幸伸	H 1 1	末吉 吾廣		
S 5 9	原 浩	H 1 3	遠山 晃広		
S 6 0	武藤 和博	H 2 0	伊地知 彬人		

帯広畜産大学



参加者名簿

卒年	氏名	卒年	氏名	卒年	氏名
名譽会員 S 3 1	鈴木時田三光茂	S 5 6	赤山晋一	H 9	渡辺暁
S 4 1	田中茂一郎	S 5 7	高木俊雄	H 9	小林美登里
S 4 6	橋本章一	S 5 7	佐々木昭彦	H 9	奥村智吾
S 4 6	本田次典	S 5 8	田中秀一	H 1 0	岩本尚太
S 4 6	大田迪典	S 5 9	市川和義	H 1 0	安達淳太
S 4 6	丹羽博和	S 6 0	牧与志	H 1 0	成田樹芳
S 4 8	中里仁	S 6 0	工藤志幸	H 1 0	清野奈美
S 4 8	片桐忠	S 6 2	八町慎悦	H 1 2	中口良典
S 5 2	三枝実	S 6 3	小林達弥	H 1 2	飯田俊行
S 5 2	西村康裕	H 1	下岡洋弘	H 1 2	井澤智
S 5 3	高畠勝美	H 4	嶋田照雄	H 1 2	慶尚
S 5 3	長澤孝一	H 4	佐藤賢司	H 1 4	修晋
S 5 5	小林秀一	H 6	北村雅則	H 1 8	司悠
S 5 5	島誠裕	H 6	西本健年	H 1 9	一生
S 5 5	矢部善一	H 6	高氏英	現役 4	
S 5 5	大塚善之	H 7	下敦英	現役 3	
S 5 5	塚田篤和	H 7	井田武		
S 5 5	増田雄策	H 7	吉泰		
S 5 5	芝伸弓	H 8	高山善		
S 5 5	蜜真弓	H 9	大石充生		
S 5 6	山口恭史		南部		

名古屋大学



参加者名簿

卒年	氏名	卒年	氏名	卒年	氏名
S 3 5	木内	S 5 7	棚瀬	H 6	服部
S 4 1	池田	S 5 7	井沢	H 6	森綱
S 4 1	天野	S 5 7	布藤	H 1 3	神野
S 4 6	岡部	S 6 2	坂口	H 1 4	園田
S 4 6	星野	S 6 3	大憧	H 1 6	鬼頭
S 5 0	塩野	H 2	小林	H 1 8	二井矢
S 5 2	浅野	H 2	畠中	H 2 0	久保
	利三郎		和義 一馬		亮太 知也

長崎大学



参加者名簿

卒年	氏名	卒年	氏名	卒年	氏名
S 2 6	渡辺 哲可	S 4 9	田川 恵一	H 0 4	大澤 剛
S 4 1	後藤 純郎	S 5 2	福留 克己	H 0 4	梶村 数弥
S 4 2	足立 鉄生	S 5 6	国広 昭彦	H 0 4	堤 裕高
S 4 2	佐々木 和行	S 5 8	井上 勝康	H 0 5	佐藤 司
S 4 2	伊藤 正	S 5 8	岸川 泉	H 0 5	宮脇 英寿
S 4 5	吉田 一久	S 5 9	大森 謙太	H 0 6	永友 幸次郎
S 4 6	近藤 善行	S 5 9	杉浦 美徳	H 0 6	松尾 邦俊
S 4 6	松原 広輝	S 5 9	中村 博之	H 0 9	永山 政美
S 4 6	宮本 秀雄	S 5 9	斎藤 直哉	H 1 2	米村 弘志
S 4 8	飯盛 佳克	S 6 0	中園 哲雄	H 2 0	中山 彰
S 4 8	内田 恒夫	H 0 2	隱崎 大山	現役 2	久保田 健介
S 4 8	田中 勝雄	H 0 2	紀伊 博孝	現役 2	佐藤 啓悟
S 4 8	平山 修	H 0 2	佐々木 正章	現役 2	森 裕一朗
S 4 9	井上 正則	H 0 3	片山 明也		
S 4 9	柴富 邦史	H 0 4	江頭 順史		

オーバー40、50



講演会



トピックス

講演会の記録 (2008/12/11 小山台会館にて)

「私のラグビー哲学と日本代表の目指すもの」

ジョン・カーワン（ラグビー日本代表ヘッドコーチ）

I have a dream.

これはマーティン・ルーサー・キング牧師が公民権運動中の最も有名な演説のフレーズだが、私もひとつの夢を持ってこの仕事に取り組んでいる。そして、同じアメリカで、巴拉ク・オバマ氏がせんだって「Yes, We can!」を合言葉にして大統領選挙に勝利した。この間とても長い年月を経ているが、この2つのフレーズには、私の思いをそのまま重ね合わせることができる。私には夢があるし、そしてその夢は実現することが可能なんだと。

2006年、ここにいるかつてのチームメイトで親友の太田GMから電話があり、日本代表のヘッドコーチとして日本にもう一度きてくれないかという要請を受けた。私はそれを請けた。

就任にあたって、私は日本代表をどのようにしていくのかという構想を練った。ワールドカップを経てさらに1年が過ぎているが、当時日本協会に示すようにいわれたそのビジョンは鋭意進行中であり、今後もこの線でいこうと考えている。それを今日ここでお話ししたい。



10年構想

40年間にわたって、日本ラグビーは世界レベルからは劣っていると言われてきた。

1968年に日本代表がニュージーランドに遠征し、オールブラックス・ジュニアを倒したが、その後は日本ラグビーは、体格に劣るし強くないと言われてきた。私はそれは本当だとは思っていなかった。

トヨタという企業について、40年前に人々に聞いたら、世界一の自動車会社になるだろうとは誰も言わない。しかし彼らは「いえいえ私たちはできますよ」と信じてやってきた。そして彼らはとうとう世界一になった。企業を例にとれば同じような話はこの他にもたくさんある。日本の多くの企業が、世界でトップシェアを誇っている。30年前にトヨタの車を買えば、エアコン、パワーウィンドウがついていた。しかし他社の車ではそれらはオプションでしかなかった。

ラグビーに置き換えて考えてみよう。日本のラグビーが世界でどうやって勝っていけるのか、をである。

英国人のようにはできない。ニュージーランドのスタイルでもできない。オーストラリアのようにもしたくない。日本人でありたい。日本人のラグビーをやりたい。それには「信じること」が必要。「Zettai Shinjiru!」(笑)。

日本のラグビーが世界のトップに入っていくためにはどうしたらいいのか。2003年、2007年のワールドカップ。その2つの大会で、日本代表は日本のラグビーのすばらしさを世界に証明できたり、もっと強くなれることを確信できた。それを通じて企業などのサポートも得られるようになった。

1987年に私がオールブラックスで来日したときには、ラグビーはサッカーよりも人気があった。大学の試合は国立競技場が6万人の観衆で埋まっていた。私の夢はもう一度、ラグビーをサッカーよりも人気のあるスポーツにするということだ。

現在でもラグビーは多くの協賛を得られるスポーツで、ネットワークがいっぱいあるスポーツである。それが一部分ではなく、すべての領域に行き渡るようにしたい。そのためには10年をかける必要があると思う。

世界に通用するイメージを

ここにいる皆さんにお聞きしたいが、日本のラグビーをどのような形にしていきたいとお考えか。

当然日本の特徴である、たとえば自陣からでも回していくような、早い展開のラグビーをしたいという答えがあるかもしれない。とにかく日本ならではのラグビースタイルを確立しなくてはならない。国内の試合でそれを確立させ、世界のトップ8に挑戦していきたい。そこで国内の試合のレベル

を上げていかなくてはならない。すなわちトップリーグのレベルアップである。

毎週のようにハードな試合が繰り返される、そんなラグビーのイメージ。プロフェッショナルのイメージがなければならない。世界に通用するものとして。

日本では大学卒業後、約80%の選手がラグビーをやめている。それも本当にいい選手が。それらをキープしていい形で継続できるようにしていきたい。

つぎの2015年のWCを招致することも大切だろう。アジアのラグビーを発展させるには日本がリードしていく立場にある。今、世界のラグビー界の1.8%のマーケットを占めているのがアジア。そこにはまだまだ伸びる余地があるし、それには日本ラグビーの発展がキーポイントとなる。ゲームをしっかりコントロールして、サポーターを増やしていきたい。

日本の優位性を生かす

日本のラグビースタイルとはなんだろうか。選手によく話すが、ここの人々にもお聞きしたい。オールブラックスよりも日本の選手が優れているところはどこかと思うか？ 今現在の話だ。世界で一番は？

俊敏性。そうだ。ではなぜ俊敏性があると思う？

身体が小さい。でもそれだけではない。大きな選手も持っている。これは我々にとってとても重要なことだ。

足の動きが速いことだ。たとえば、ここからそこ（舞台の端の壁）まで、競争すると、日本人はすべてのレースに勝つだろう。というのも、足の回転が速いから。それが俊敏性と結びつく。短い距離を最速で走れる。

このスピードと俊敏性を日本のスタイルに持ち込みたい。1968年の試合に戻るが、日本代表はすべての展開が速かった。オールブラックス・ジュニアはそれがとてもいやだった。日本人のスタイルで速いゲームプラン。そして休みのない試合。それで敵にプレッシャーをかける。

その他に日本人が長けているものはなんだと思うか？ 低いタックル。それもそうだがもっと別のもの。

「頭がいい」。そうそのとおり！（笑）

ここにいる皆さんには大学出で、ラグビーをやっていた。我々のチームも、少数を除いて、ほぼ大学出である。ということは、世界的にも最も知性に富んだチームであるといえる。それは使える。

なによりも速さ。前に出るタックル。一人目二人目が刺さる。そして頭を使う。セットピースで。スクラムのダイレクトフッキングやショートラインアウト。いずれも日本が編み出した。セットピースは頭を使わなくてはならない。

11月にはキックを多用したが、それは単に陣地をとるというだけではなく、我々のゲームプランに入っていた。2007年もすべての試合では生かせなかつたが、場面場面で使うことができた。

日本のスタイルをきちんと貫けば、確実にトップ8に入れると私は信じている。

選手選考と育成

選手をどのように選考するか。どのように探すか。ここでも今までの考え方を変えなくてはならない。

どの大学かという固定観念ははずす。どの会社でプレーしているかも問わない。いい選手であればどこのチームでも構わない。毎回試合を観て、分析して選ぶ。

選手の育成も外せない。日本のラグビーは大学なくしては語れない。

そこでちょっと変えて行かなくてはならないことがある。それはちょっと頭の中においてほしい。

ニュージーランドでは18歳になればプロでプレーができる。ということは、プロのトレーニング、身体づくりが行われるということ。そこではすべてのスキルが変わっていく。

日本で大学に行って、23~4歳になったとき、ニュージーランドで18歳からプロで戦っている選手と同じレベルでやらなくてはならない。こういう事態にまだ日本の学生は遭遇していない。ある大学ではプロのようなトレー



ニングをしているが、ある大学ではやっていない。そういう意味で、各チームでプロフェッショナルのイメージをもって行かなくてはならない。

たとえば、関東学院の北川選手は、身長 197cm。たいへんいいアスリートだ。ただしベンチプレスは 80kg しか挙げられない。ニュージーランドでは同じサイズの選手ならば、160kg は挙げる。

そういう意味で、頭の中からプロの意識を植え付けていって、卒業して日本代表に入っても、怪我をしないですむし、第一線でやっていける。選手育成は重要な課題だ。

外国人選手についても触れたい。当然、日本代表は全員日本人であることを皆さん望んでいるはず。これが自然だ。

ただし、そこに向かう前に、不足するポジションで外人を使う。私の考えでは、外人と日本人が同じレベルであれば日本人を使う。しかし、今現在での結果を出すために必要ならば、不足しているところを外人で補う。

このプランで行けば 10 年後には全員日本人になっているであろう。これは皆さんの望むゴールであり、当然私のゴールでもある。

着実にこなしたいロードマップ

2003 年以降の日本代表はどうだったか。2003 年 WC で日本ラグビーは賞賛された。しかし、その後はどうなったか。それまでの主力メンバーが抜けて、悪い結果しか出せなかった。

2007 年の次の年である 2008 年は勝ち進んでいかなくてはならない時期であり、それが移行期間というものだ。このシーズンプレーしている選手が 2011 年までいけるかどうかである。

2009 年はアジアカップ優勝、これはそう難しくはない。勝てなければ私は太田 GM に首を切られる。そしてパシフィックネーションズカップで勝ちにいきたい。

2 年前は日本は世界ランキングで 18 位だった。それが 14 位にまで上がったが、今はなぜか 16 位。

我々はなんとかランキングで 10 位に入り、その後に 8 位に向かいたい。トンガ、サモア、フィジー、これにニュージーランドマオリを加えたパシフィックネーションズカップに勝利したい。

フィジーが 10 位、サモア 12 位、トンガ 13 位、これらを破れば、10 位になれる。2009 年はそれに向けての重要なステップの年である。

もちろんニュージーランドとはやりたいが、11 月のテストマッチシーズンには、スコットランドとかイタリアとか、やはりいいレベルのチームと試合をすることにより、我々に必要なものはなにかが見えてくる。

2010 年、パシフィックネーションズカップで 3~4 勝をあげることにより、2011 年の戦略プランができあがってくる。

そして2011年のWCで2勝、そしてトップ8へのチャレンジをしていきたい。そこで楽に勝てるプールに入れるようにならう。

ニュージーランド、フランスがいるがこれらは確実にやっつけていけるだろう。（笑）

日本の土壤を生かしたい

日本はいいものを持っている。それは企業文化。約20企業が我々をサポートしてくれている。

オーストラリアもニュージーランドも、日本企業を求めている。それはなぜか。

渋谷駅。毎日毎日、人がたくさんいる。ニュージーランド、オーストラリアの人口よりもたくさん的人がいる。（笑）たったひとつの駅ですら。

そういう意味で、国内でいい試合ができれば、ダニエル・カーターも来たいと思うだろう。アジア、南太平洋、中国や韓国からも試合が来るかも知れない。毎週、6週間。クルセイダーズ、ワラタスなどと試合ができるかも知れない。

そうなれば日本のレベルも上がる。約20企業がサポートしていて、それが日本ラグビーのレベルを高めている。国内レベルが高くならなければ、国際的な高いレベルの試合はできない。そういう意味で、魅力的な国内のゲームを実現していきたい。

日本が教えてくれたもの、それは「我慢」。（笑）

当然変えなくてはならないものがある。ただし、それには時間がかかることもある。そこで私は「我慢」を学んだ。（笑）「Gaman!」「Sumimasen!」「Gaman!」（笑）

40年間変えてこなかったことを、これから変えて行かなくてはならない。世界と戦うために。

私は日本人のスターを作りたい。世界で通用するような。それは若い人たちにはとても重要。野球、サッカーは世界に出て行っているが、ラグビーには今現在そういうスターがない。それを作って行かなくてはならない。

いつも言おうとすると止めろといわれることがある。それはちょっと言わないでくれよ、といわれることがある。

それは大学の試合の変革。それは無理だ、そのことだけには触れるなどいわれる。（笑）でも「Yes, We can!」（笑）「I have a dream!」（拍手）

私は大学の試合をトップリーグの試合のような組み合わせにしたい。毎週競った試合が続くような。

早稲田には120名の部員。皆さんの8大学は...30?。そういう偏りをなくしていきたい。平等にプレーヤーが行き渡り、そしてハードな試合が多くなるようにしていきたい。そしてその中で選手のフィットネスを作って行かな

くてはならない。講演の前に聞いたが、皆さんの大学の大会の枠組みが有名校と違うことはおかしい。ひとつの組み合わせで行くべきあろう。でもそれを言おうとすると「シーッ！JK」。（笑）

外国人選手に対するポリシーも変えていくべきであろう。日本代表でプレーしている外人選手は日本を深く愛している。私は彼らは外人扱いではなく日本人として扱うべきだと考えている。そういう意味で各チーム3人でプレーができるようにした。なぜか。それによって全体のレベルが上がるからだ。

レフリーも重要である。国内の試合で国際レベルの実力のあるレフリーによって行われることが重要だ。

武士道の精神を日本代表に

最初に日本に来たとき、武士道の本を読んだ。1958年に英訳された本だ。

どんなことでも成功した人は、だれでも、ひとつの強い精神をもっている。そういう意味で日本の文化、歴史を学びたいと思った。とくに侍の精神に惹かれた。私自身そうありたいし、それと同時に、ラグビー選手もこういう志を持たなくてはならないのではないかと考えた。

選手にも話をした。私たちにとっての武士道精神とどういうものなのかを語った。当然中にはわからない選手もいた。しかし、日本、日本人というものを見つめ直していくと、これはなんとか取り入れていきたいと考えている。

武士道を学んで、私は次の7つの志を持って行こうと考えている。



1. 義 正直・正義。そこに迷いは存在しない。自らとチームを信じること。やること一つ一つを。トップ8への道を。選手同士を、自分自身を。
2. 勇 勇気。単に闇雲に突っ込むことではない。知的であり真に強いことである。おそれるべきものとおそれないものを知る。日本代表にとっては、チームのために身体をはる。ミスしたらもう二度とはすさない。疲れてもとまらない。これは図れることだが、しかし、勇気 = 気持ちの部分は図れない。代表はどんなに疲れていてもやるべきことは身体を張ってやるということ。
3. 仁 人一倍の鍛錬を積むことで侍は強くなる。代表としてはチームメイトを裏切らないということ。
4. 礼 感謝の気持ち。今の自分があるのは一人の力だけによるのではない。試合に出るときは家族やチームメイトに対する感謝の気持ちを忘れないこと。
5. 誠 侍は一度口にしたことばは必ずやり遂げる。やるといつたら誰がなんと言おうとやり遂げる。練習で目標を掲げたら必ずそれをやり切る。
6. 忠 常に忠義の気持ちを持つ。責任を持つこと。桜のジャージを着た以上すべてを出し切る。
7. 誉 侍は自分に嘘をつかない。それが名誉。自分に嘘をつかない。我々にはプライドがある。試合では全力を尽くしグラウンドには何も残してこない。

皆さんには感謝の気持ちを伝えたい。日本は強くなれると確信している。武士道、日本の文化、これが日本ラグビーを支える骨格になりうると信じている。

今日お話をすことすべてがもしできるならば、日本代表ならではのプレーができれば、侍の心構えを持ち、頭を使って戦えば、トップ8は夢ではない。日本人ならではのラグビーは世界に互していくと信じている。

* * * * *

(以下質疑応答)

Q 日本でプレーすることになった当初、日本のラグビーにとまどいを感じたということを読んだことがあるが、それはどういうことか？

A ディフェンスのラインスピード。ディフェンスが素早く出てきたときに自分がどうしていいのかわからなかった。3~4ヶ月それに慣れるのに時間がかかった。だから、海外のチームにはそれをやってもらいたい。

Q JKの本によれば、昔トレーニングで木と木の間を走ったとのことだが、それなら怖くなかったのでは？

A 木は動かないから。（笑）

Q 今、日本はどこまで来ているのか？ 足りないことはなにか？

A 11月に17人怪我人がいた。8人新人が入ってきた。最初はフロントローに心配があったが、なんとか間に合った。あとはロックにもう少し厚みがほしいがそれもやがて見つかるだろう。今は12位には入れると思っている。80分間フルにスピードが持つことが課題。今のところ順調に行っている。

Q 日本ではラグビーに限らず、優秀なプレーヤーをピックアップするのが難しいと思うが？

A ラグビーをもっと有名にしなくてはダメだ。若い世代が興味をもってくれなければ。ラグビー人気が出てくれれば、自ずと可能性が開けてくるだろう。そして、まず選手を見るときには、テクニックに着目してほしい。野球のことを考えたら、日本人は小さい頃から親しんでいる。サイズよりもテクニックを重視すべきだろう。
若いときからラグビーのスキルを身につけることが重要。スクラムは25回ぐらい。ラインアウト25~30回。ラックはだいたい145回。
その姿勢はこれぐらい（約1m）か。これは日本人に適している。しかし、小さいだけではダメ。テクニックがないとダメ。それは他のスポーツでも同じこと。そのテクニックを若いときから身につけていればかなりちがう。低く激しくだ。

Q 哲学的になるが、ラグビーの価値とは？ 次の世代にどういうことを伝えるべきか？

A 私はラグビーは世界で一番のスポーツだと思う。毎日自分のキャラクターをテストできる。ラグビーさえやっていれば、その後の人生はOKだ。というのも、ラグビーは倒れて起き上がってのスポーツ。常に前向きでなければダメ。一人ではできないスポーツ。人生もしかり。右左、内外、常にサポートが必要。グラウンドに倒れてもサポートプレーヤーがプロテクトしてくれる。人生も同じだろう。

2年前イタリアでおもしろい体験をした。ある日帰宅したときに妻とその友人がキッチンで話していた。けれどもその友人は泣いていた。ちょっとやばいなと思って、その場をやり過ごそうとしたら、妻がちょっと逃げないでこっち来てよと。そこで彼女の話を聞くと、息子のことでの悩んでいるとのことだった。9歳のやんちゃ坊主で、いつも友達といざこざを起こしていた。で

はちょっと明日見に行こうということになった。たしかにやんちゃそうで、元気さを発散させている子だった。そこで、明日の夜6時に迎えに行って、ラグビーに連れて行った。ご両親はラグビーを知らないし、その子も初めてだった。実際に見よう見まねでやってみたら、すごくいいタックルをした。おおいいなおまえ、ナイスタッブル(笑)。その子は怒られると思ったらしが、ほめられた。そこで感動を得た。今度はボールを持って突っ込んだら、誰かにタックルをされた。そうしたらその子は泣き出した。でもコーチは泣くな、立てと。そこで彼は、自分の感情をコントロールしなければならないと学んだ。その後学校での態度が変わったという。

アグレッシブさを発揮しつつ、感情をコントロールする必要がある。そういうスポーツであることは、若者にとってはとても重要だろう。

Q イタリアと日本で違うことは？ また同じことは？

A たとえばそこに壁があったら、ニュージーランドではどうやって壁にぶち当たらずに避けていけるかを考える。けれども日本人は間違いなく突っ込んでいく。(笑)これは一面すばらしいことでもある。(笑)でもイタリア人はなんでそんなことしなきゃいけないのかとぐだぐだいう。(笑)

文化的側面からいうとそこが違う。ラグビーの文化として。イタリア人はいい面を持っているがダメな面もある。

日本に初めて来たときに気がついたのはみんな「行動 見る 判断」。ラグ



ビーでは「見る 判断 行動ではなくてはいけない。イタリア人は、「何故 何故 何故」。（笑）

そういう意味でとても接しにくかった。しかも個々に接しなくてはダメ。日本人は、こうしてくれと言ふことについてはすべて忠実にやろうとしてくれる。でも日本人には考えてほしい「見て 判断 行動」。こうなってほしい。そして日本人とイタリア人の同じところは、自らを信じていなかつたこと。そしてミスを怖がつた。これは日本代表も同じだった。しかし私は今ミスを犯してほしいと思っている。学ぶにはそれしかないから。

もう一つ日本人とイタリア人が似ているのは食べることが大好き（笑）だということだ。

Q さきほど「我慢」といったが、どういうところで強いられているのか？

A たとえば、ぽんぽんと物事を変えようと思ったときに、文化として、話し合ってこれが正しいかどうかを見つめてからという段取りがある。これはすばらしいことだと思う。いきなり変えてへんなミスをしないというのはいい。しかしたしかに問題があるのに、それを変えるのに時間がかかるというのが…。でもレスポンスはだいぶよくなつた。（笑）

Q うわさでは、来年オールブラックスが日本に来るかもしれないといわれているが？（笑）

A そうあってほしい。日本のラグビーを伸ばすために、強いチームが目の前で試合をしてくれるのはとてもいいことだ。プレディースローカップ（ニュージーランドとオーストラリアの定期戦）を日本でという話もあるが、それはとてもいいことだと個人的には思う。

Q JKが現役のときにマイケル・ジョーンズとどっちが速かったか？（笑）

A 私だ。（笑）

彼はすばらしい選手だ。親友でもあるので長男には名前をもらった（マイケル・ニコ・ジョーンズ）。彼とはグラウンドの中で特別な関係があった。常に沈着冷静な男で、誰かにパスを出したいと思ったときには、いつも彼がそこに来た。1990年に膝を怪我する前までは、一度もレースをしたことがない。（笑）

これはすばらしいと思っているが、膝の怪我から復帰した後、プレーのスタイルを変えた。7番から6番に。身体を大きくしてタックルを強化した。すばらしい選手だ。

Q JK の本に木と木の間を走り抜ける練習がかかれてあったが、それが第1回ワールドカップの独走(対イタリア戦)につながった？ 日本のタックルはどうなっている？

A 私が走るときの歩幅があるが、ディフェンスが速いと、次の足を前に出すのが難しい。動く時間がないと苦しい。

対イタリア戦の時は動く時間がたくさんあった。3歩動ければかなり俊敏にこなせる。したがって、ディフェンスの時には速いプレッシャーが必要。2007年のフィジー戦では、彼らはノックオンを多発した。こちらがプレッシャーをかけ続けたからだ。さらに低く来られたらたまらない。ジュニアオールブラックスとやったときにも、40分後、わずか2点差だった。彼らはプレッシャーに対処できなかった。後半、オフロードするようになった。今年はそこで、タックルを一人目が低く、二人目がボールへと徹底するようにした。

Q 秋にだいぶ新しいメンバーを入れたが、ひとつのポジションで同じような人間がいたらどうするか？ 決め手は？

A すごくいい質問。（笑）

私たちはひとつのポジションにいい選手を2人を用意しようとしている。従来はもっとも優れた選手が一人いればいいという考え方だったかもしれないが、これからはベストを2人置くようにしたい。

今年は箕内、ホラニ、ハリ、そして今は菊谷というように。このように今は選択肢を広げられることを目指している。

そして質問の答えとしては、その時点で誰がベストかで決める。たとえば、タックル回数などのデータや相手にとってどうかなどを考慮して決める。これは楽しい仕事ではないが、逆に言えばいい状態もある。ベストの選手を30人揃えたい。

Q ヘッドコーチの役割は重要だが、歴代の監督と何がいちばん違うと思っているか？（笑）

A 正直なところわからない。これまでの40年間は、日本はやれることをやってこなかったのだと思う。太田GMから就任要請を受けて、選手を見たときに、私は日本代表には可能性があると確信をした。

そう信じることができれば、皆さんにはそれを感じることができる。勝てばそれが見えてくる。

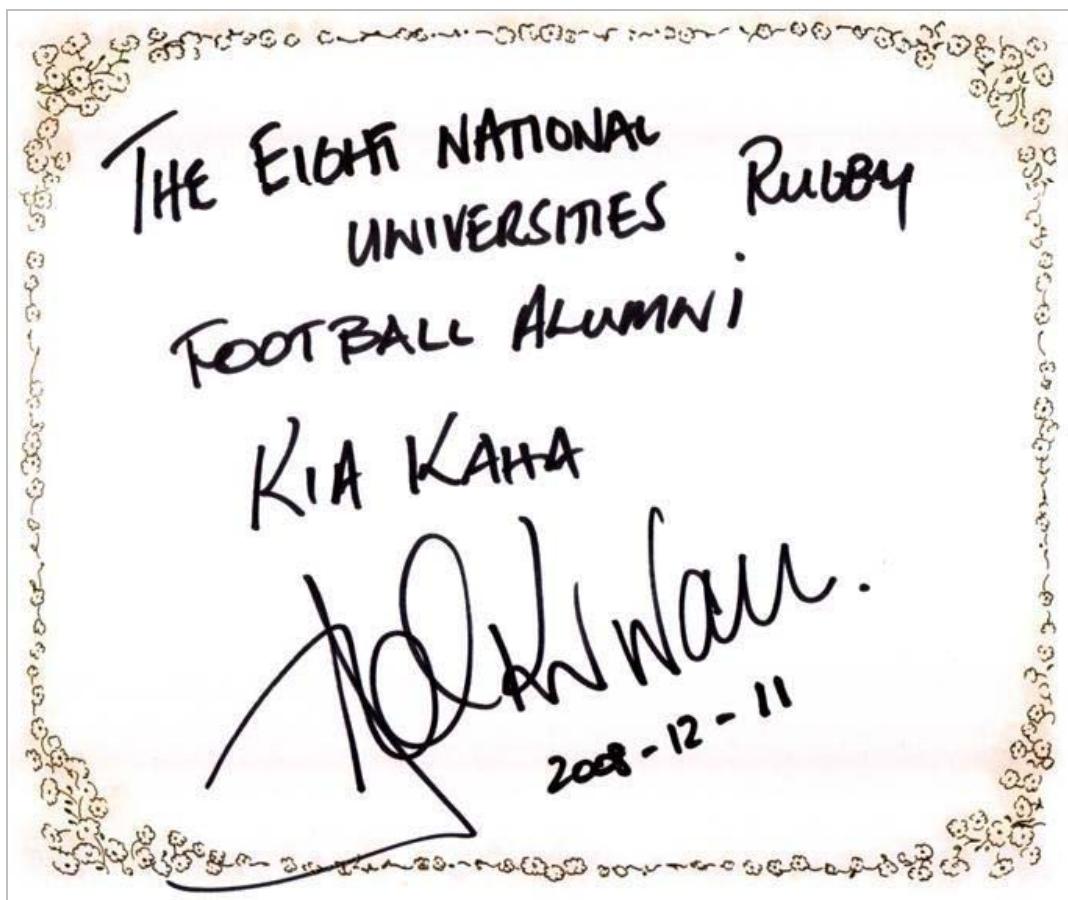
負けてしまえば、過去のコーチと同じで、やはり日本人は小さい、レベルが

低いと思われてしまう。しかしそれは間違っている。

負けて体格や資質のせいにするのは簡単だが、そうではない。負けたらコーチの責任で、それは直していかなければならない。

トップリーグのレベルが上がって来て、若い選手が活躍し出していることがその現れであり、日本ラグビーの可能性を示しているものだと確信している。現在はそういう状況だ。だから私はラッキーだと思う。

今日はありがとうございました。（拍手）



（文責：帯広畜産大学 0B・小林）

各大学ラグビーデ部分OB会費の状況

2009年2月24日

大学	OB会費(年会費)	納付者数	会員数	納付率	徴収総額	その他
九州大学	¥15,000	195名 (07年度 186名)	489名	S25～48年卒：各年55%以上 S49～63年卒：各年30%台 H2～19年卒：各年0%～10%台	294万円	名称「玄友会」 寄付はその都度、徴収(主に東北代表、関東との代表決定) 戦、瑞穂遠征等の際に会費と一緒にして募集)
北海道大学	¥5,000	123名 (06年度)	約500名	約25%		
東北大學	¥3,000 (卒年に關らず同額)	96名 (07年度 101名)	369名 (連絡先の 分かれる会 員数)	S25～48年卒：各年平均43% S49～63年卒：各年平均32% H2～19年卒：各年平均 6%		現役への寄付金は別扱いで、OB会費と一緒に郵便振込 名称「西陵ラガーノOB会(経済学部卒中心)」。九州、関西、東 海、関東の4支部。各支部独立会計。2年に一度全国総会を 開催。西陵会員総数は約290名。
長崎大学	¥3,000	約60名	約390名	66% (年会費以外は西陵関東支部)		
名古屋大学	¥10,000		約300名			OB会資料が送付され、感謝の意を込めて寄付金(OB会費と はなっていない)高齢者が記載される。
旧神戸商船大学 (現神戸大学海事 科学部)	1口 ¥3～5,000 通常2口但し、2口以上					
小樽商科大学	¥5,000	91名	405名	全体納入者(寄付金込) 91名/405名・22.5% 納入対象世代納入者 87名/296名・29.3% 納入者はやはり固定化の傾向	予算総額 年50万円	65歳以上は会費免除。年代別では50歳前半以上の納入は 高いが、40歳代前半以下は20%前後。 用途は、現役へのボーラー やタッカルマシンなど要望する用具 の提供、正月の総会(東京)への現役招待と大学選手権の 決勝観戦費用。特別コートの構造費と大学の指導に關わる費用は 別途集金し、合計すると約80万円の規模。
帝広畜産大学	¥5,000	約80名	385名	支払者固定化の傾向がある が、結構若手も納入		名称「緑白グラブ」年に回OB会雑誌「緑白」を発行し、振 込書・お願いの文書を送付。
京都大学	・1口 ¥5000とし、各年 次以下の通り ・大学院生・5回生以上 の学生:1口 ・卒業4年目迄の社会 人:2口 ・5年目～59歳迄:4口 ・60歳～64歳迄:2口 ・65歳以上: 任意					会費とは別に芝生化のための寄付を募り、天然芝のグラウ ンドを実現

東京大学	年額20, 000円 (部OBで学生身分の 者は10, 000円)	449名 (内210名 程度自動 引落とし)	70% (449人/総数645人) 昭和22年卒～昭和39年卒 74人/122人 61% 昭和40年卒～昭和55年卒 106人/141人 75% (前年 6%) 昭和56年卒～平成6年卒 148人/193人 77% (前年 6%) 平成7年卒～平成20年卒	943万円	長老OB(昭和20年代卒)或いは平成9卒以降の若手OBの 納入率が低い(5割以下)傾向あり 年度毎の納入状況(低落傾向に歴止めがかかってきた) 平成17年度 927万円(45人) 平成18年度 825万円(410人) 平成19年度 715万円(345人) 平成20年度 943万円(449人)
	年額20, 000円	約300名 (ほとんど が自動引 落とし)	平均 約60% 人工芝グラント造成時納入率 昭和20年代卒 85% 昭和30年代卒 70% 昭和40年代卒 76% 昭和50年代卒 62% 昭和60年代卒 70% 平成10年代卒 37% 平成10年代卒 40%	約600万円	・部員は年間約10万円の部費を納付 ・OB会費は現役部員の合宿や遠征費とかボールなどの器 具備品などの補助 ・ラグビー場人工芝寄附は客員を含め300名の方から850万 円。大学に残額を負担し工事。なお寄付残額は2期工事のた め大学に預託。
一橋大学	年額20, 000円	約500名			年間予算 26百万円 前後
慶應大学	卒業後8年間:1万円 -9年目以降:2万円 -卒業後52年間(75 歳)を以つて終了 -引続き納入意思ある 正会員は納入可 -10年超会費滞納者: 正会員を喪失の可能 性あり(理事会承認事 項)				・慶應の年会費はH20年に@年1万円を直上げし、70歳から 免除を5歳引き上げている。 ・部員は合宿所での喫食費等で月約1万数千円支払う(自宅 通学の部員は練習後合宿所で夕食を食べ帰宅)
筑波大学	¥10,000	約250名	約1,000名 25%程度		納入率が非常に低いのが現状
東京海洋大	1口 ¥5,000 1口以上	約100名	約500名 旧水産大 約260名 旧商船大 約240名	約20%	・用途は、主に備品、ジャージ、合宿、定期戦(神戸、学習院)等へ の援助 ・海洋大OB会は08年3月に旧水産大と旧商船大OB会を統合。以 前のOB会費は商船大1万円、水産大5千円であった。 ・08年度予算 77万円 08年度予算 77万円 を11月に追加で微収した結果、08年予算を上回る徴収金額を得 た。

順不同

関東対抗戦・リーグ戦・主要校の年会費	対象校内訳
20,000円 4校	12,000円 2校
15,000円 3校	10,000円 10校
	対抗戦A 8校 対抗戦B 8校 リーグA 3校

各大学投稿

ノーサイド

北大 昭和 55 年卒 野村文明

ノーサイド。この言葉がラグビーの試合終了を示すのは、拙文を読まれている方々には説明するまでもないことでしょう。おそらくはラグビーを始めた頃に、「試合が終われば敵も味方もないからノーサイドと呼ぶのだ」と説明を受けたことと思います。あるいは、ラグビーの競技経験がなくとも、テレビ中継を見て自然に理解したのではないでしょうか。さらに、1980 年代には松任谷由実のノーサイドという曲がヒットしたこともあり、日本国内では定着しています。

もともとは英国で使われていた用語が、ラグビーが日本に伝えられた際にそのままカタカナで使われるようになったものだろうと、個人的に解釈していました。

しかし海外（ヨーロッパおよび南半球の強豪国）では、試合終了時はフルタイムと言って、ノーサイドは使用しないのだそうです。かといって、日本で独自に産まれた言葉でもない。ラグビージャーナリストの村上晃一氏によると、イングランドのパブリックスクールでの生活を描いた「トム・ブラウンの学校生活」という小説の中で、「ノーサイド」＝「勝負なし」、「試合終わり」と訳された例があるのだそうです。試合の終わりを意味するノーサイドという言葉は、確かに使われている時代があったようで、ラグビー博士の小林深緑郎[†]さんは、1970 年代のイギリスの新聞記事で「ノーサイド」の記述を憶えているそうです。

最近では、海外（とくに南半球）から有名な選手がトップリーガーとして日本でプレーしていますが、彼らもノーサイドという言葉は知らないようです。ジョージ・グレーガン（元オーストラリア代表キャプテン：サントリー）もそうだし、ルーベン・ソーン（元 NZ 代表キャプテン：ヤマハ）もしかり。ソーンは、ノーサイドについてニュージーランドでは聞いたことがないけれど、そのコンセプトは素晴らしいと語っています。ニュージーランドにも、"What happens on the field stays on the field" という考え方があるとのこと。試合中のフィールド上では、相手を倒すために全力で激しいプレーをするが、それは試合中のことだけで、試合後は友達に戻る。その考え方方が共有できるからこそ、八大学ラグビー大会が続いているのだと思います。われわれの場合は、もともと、試合中もずっと友達関係かも知れませんが。さらにソーンの言葉を借りると、アフターマッチ・ファンクションはラグビー文化の重要な一部であるにもかかわらず、スーパー14（南半球 3 力国の地域代表チームによるリーグ）では、試合後の移動の必要性からアフターマッチ・ファンクションをやらなくなってしまっていることについて、悲しいこと、恥すべきことと嘆いています。八大学ラグビー大会の存在意義は、ま

さにアフターマッチ・ファンクションのためにあると言っても過言ではなく、ラグビーの本場で失われつつある大切なものを、我々が日本で続けていくということで何だか幸せな気持ちになってしまいます。

話は変わりますが、今年の6月にジュニア・ワールド・チャンピオンシップ（JWC：20歳以下のラグビー・ワールドカップ）が日本で開催されるのをご存知でしょうか。この大会は昨年ウェールズで初めて開催されたもので、今年は第2回の大会として日本で開催されます。また2015年、2019年のワールドカップ（RWC）開催地が今年の7月に決定されます。RWC開催誘致を目指していける日本にとって、JWCの成功は欠かすことのできないことです。予選プールは、国内の4会場で開催されますが、八大学ラグビーと縁の深い秩父宮、瑞穂の2会場も含まれています。大会が成功を遂げられるよう、われわれも会場に足を運びましょう。そして、日本発でノーサイドという

言葉、そのコンセプトが世界に発信されることになれば、素晴らしいことだと思います。

この大会を契機に国内のラグビー人気が、かつてのように盛り上がる日が来る¹ことを願わずにはいられません。

ところで、ユーミンのノーサイドの歌詞のモデルって、誰だかご存知でしたか。トップリーグで秩父宮 FM の放送を担当している上田昭夫さん（慶應OB：元日本代表）によると、松尾雄治さん（明治 新日鉄釜石）がその人らしいですⁱⁱ。たしか本人か、ご主人の松任谷正隆さんから聞いたと言ってました。



¹ こばやししんくろう：ラグビージャーナリスト。前出の村上晃一らとともにJスポーツでラグビー放送の解説を務める他、ラグビーマガジンに海外ラグビーの記事を書いています。

ⁱⁱ Wikipedia には以下の説が記載されています。「モデルは天理高校と大分舞鶴高校とされている(= 1984 年正月、天理 18 - 16 大分舞鶴。試合終了直前のゴールキックが決まれば同点で両校優勝だったが左に外れた。その直後ノーサイドの笛が鳴っている。)」

まんぷくラガーマン誕生秘話

東北大学 平成11年卒
鍋谷 仁志

広瀬川のせせらぎを感じながらグラウンドを駆けていた頃がまだつい先日のように感じられてならない、とは言っても、卒業して早10年が経ちます。周りを見渡せば、かつて苦楽を共にした仲間たちも、それぞれのフィールドで、必要とされるプレーヤーに鍛え上げられ、充実感が表情に満ち溢れてくるようになり、ただ飲んでバカ話をしている時でさえ、ひしひしとそれが伝わって来るようです。とは言っても、10年という年月にはやはり人は何かの区切り、次へのスタートを意識することが多いようで、新たなステップ、新たな道へ進もうと、自分自身を見直す時期でもまたあるようです。特に、どんな苦境でも前へ進むことを叩き込まれたラガーマン達は、まさに先行き不透明な経済状況に突入した昨今においても、逞しく道を切り拓き続けているように思えるのは、単に私の覇目のみによるものなのでしょうか。

かくいう私自身も、3年前、サラリーマン生活に終止符を打ち、ラーメン職人の道を歩み始めました。そしてついに、このたび、自分の城を持つに至りました。ここまで道にも、様々な苦難、決断がありましたが、どうにか進んで来ることができたのは、やはり、常に自ら道を切り拓き続けてきた諸先輩方が、築いて来られた土壌があったからこそ、と思えます。

ラグビーを始めたことで、私は様々な形で精神的支柱を得ました。高校時代は、「あのランパスに比べれば」、「あの果てしないモール練習に比べれば」と、常に自身の受験勉強に気合いを入れ直す魔法の言葉を授かりました。まさに「ヤカンの水」のように、これによって、また走り出せるのです。お陰で、大学受験は1浪で済みました。大学に入ってからは、破天荒、波瀾万丈と呼ぶにふさわしい先輩方の振舞、生き方に触れ、「1年くらい留年しないと足跡は残せない」と、気長な気持ちで単位取得に臨むことができ、最短の1留で卒業を果たせました。ただ、その、一見するとただの暴れ者であったような先輩方も、社会に出てからはそのエネルギーを仕事にぶつけ、各方面で大奮闘されている姿に感服しておりました。

私も、卒業後は、先輩方のように、社会において必要とされ、存在感を示せるようになりたいと考えながら、将来を選んできました。初めは、自分の役割は、国際協力の分野で果たせるのでは、と、英国留学に踏み切りました。が、私がその後選んだのは、帰国してサラリーマンになることでした。ただ、そこには、常に自分の考える、社会での役割、というものが一貫しており、珍しいとは言われるかも知れませんが、自分の給料から税金が引かれているのを確認すると、それが誰かの役に立っていることを想像し、充足感を得ることができていました。自分が働くことで、人の役に立ちたい、助けになりたいと考えながら選んできた道の根底には、やはりラグビーで培われた精神があると思っております。自分のチームをもっと強くしたい、チームの弱点を何とか克服したい、と考えたとき、ラガーマンなら誰もが、まず自分が強くなることでそれを達成しようとしたはずです。「あいつがもっと早く走ってくれればチームの走力不足が補えるのに」とは考えなかつたはずです。私も、そうして、次第に独立心が育まれていったのだと思います。

そして私が行きついたのが、飲食業でした。飲食業の醍醐味は、自分が作ったものを目の前で食べて頂き、そして目の前で結果を見ることができます。「おいしい」と笑顔で食べるお客様の姿に、力を頂けます。そして私は経営者になることで、より多くの「おいしい」の結果としてより多くの収入を得ようと目論んでいます。私の次の役割は、その収入を、湯水のように使うことです。私は、伝統ある東北大学の経済学部で、お金が循環するモデルを学びました。お金は多く使えば使うほど、より多くの人



が潤い、また、それが自分にも戻ってくるはずなのです。自分が投げたお金のブーメランが戻ってくるのに、何日かかるのか、教えてくれる先生はありませんでしたが、きっと、生きているうちには戻ってくるだろうと信じ、これが私の次の役割に違いないと、走り続けたいと考えております。

最後まで読んで頂いた皆様には、是非その役割の一翼を担って頂きたいと思います。

お近くにお寄りの際は、是非、ラーメンでお腹を一杯にして行って頂きたいと思います。

らーめん大 大久保店店主

「ラーメン大 大久保店」

〒169-0073

新宿区百人町1-20-3

03-6908-7973

営業時間 11時～翌1時

(年中無休)

北海道支部発足について

小樽商科大学ラグビー部後援会

北海道支部長 沢藤洋一

<昭和45(1970)年卒>

小樽商大ラグビー部後援会の北海道支部が今年(2009年)1月に発足いたしました。

近年、若手OBからの後援会費の納入が極めて少なく、ご多聞に漏れず納入者の高齢化が顕著になりつつあり、現役を支援するための資金が逼迫してきているのが現状です。今後、後援会活動を継続していく為にはしっかりと財政基盤を構築していくことが大きな課題となってきております。

その為には、この処の商大生の大半が北海道内の出身者で、卒業後も道内に就職する者が多くなっている事を踏まえ、若手OBの会費納入の啓蒙と、現役との接点をより多く持つことで、卒業後もOBとしての自覚と責任をもってもらうことを主旨として北海道支部を立ち上げた次第です。

小樽商大ラグビー部は1925年(大正14年)創部で84年間の輝く伝統と歴史を堅持しております。その歴史の始まりは大正15年6月15日に挙行された北大予科との第1回定期戦に遡り、これが北海道での最初のラグビー公式戦であるという輝く伝統と歴史を持っております。

我がラグビー部は3度ではありますが、北海道制覇を成し遂げ、瑞穂ラグビー場に出場を果たしており、現役には絶えず北海道の頂点に再度立ち昇り、瑞穂での勇姿を、と願っております。

そのためには後援会の組織力と財政力をさらに高めることが重要な課題であることは云うに及びません。我々が有形、無形のサポートをすることで、現役の一層強固なチームづくりに貢献できるようにするのが後援会の大きな役割です。

支部発会式には山本学長をはじめとして総勢60名近くの方々にお集まりいただき、大変盛会にスタート切りました。その中で、藤江監督から現役に対して「今までと同じ量と質の練習では1部に残れない」との厳しい指摘がございました。われわれとしても「目標は1部に残ることでない。北海道制覇をすることだ！」と強く云いたい。その為に後援会活動があります。この支部発足を機にOB同士が一丸となって、現役との接点を更に深めていき、そうすることで現役が強くなり、優勝の美酒を味わう素晴らしいお互い共有できることができたらと願っております。

スポーツは知的好奇心をして新しい世界を知るということが大きな醍醐味です。うまくなつた時のことは、なつてみなきや分らない。強いチームを築き上げた仲間達はより強い絆で結ばれます。自分の知らない自分を発見したことで、人生観、世界観が変わります。

現役も我々も新しい世界を知ることを目指して挑戦していきたいと思います。



横井さんに学ぶ

小樽商大 1974 年卒 木呂子 真彦

以前八大学ラグビーOB 会で講演頂いたかつてのジャパンの名センターでキャプテンの横井章さん、ご存じのように 60 歳で定年を迎え、日本のラグビーを面白くしたいという一心で京都成章高校を指導したのを契機に、この 8 年間請われるままに手弁当で全国の高校生、大学生にラグビーの真髄を教えてこられました。横井さんの爽やかな志ある生き方は、私自身 60 歳以降の生き方を考える上で学ばなければと思っております。

昨年度横井さんが指導され、全国高校ラグビー大会に出場を果たした高校が 8 校あるそうで、京都府の決勝と一緒に観戦させて頂いた時にお聞きしたのは、京都成章、御所工業・実業、秋田中央、仙台育英 4 校でした。トーナメントを勝ち進む中でこの 4 校が対戦し、その結果は以下のとおりでした。
(2 回 戦) 秋田中央 8 - 7 仙台育英、(3 回 戦) 京都成章 34 - 8 秋田中央
(準々決勝) 京都成章 8 - 7 佐賀工業、御所工業・実業 40 - 17 流経大柏
(準 決 勝) 御所工業・実業 3 - 0 京都成章
(決 勝) 御所工業・実業 15 - 24 常翔啓光学園

また、大学でも、関西大学 A リーグで関西学院大学が初戦同志社大学を破って快進撃、関東大学対抗戦でも帝京大学が初戦早稲田大学を破り快進撃、両大学とも首位でシーズンを終え、全国大学ラグビーフットボール選手権に出場。関西学院大学は法政大学に 2 回戦 44 - 12 で敗れたものの、帝京大学が決勝に進出しました。

1 月 9 日帝京大学が横井さんの母校早稲田大学と対戦する決勝前夜、小樽商大ラグビー部 OB の新年会に駆けつけて頂き、上京した小樽の現役の質問に即座に紙ナプキンを潰してボールに見立て、プレーを再現しながらその疑問に答え、スピーチでも「小樽商大は、大学で初めて指導したチームで、再び北海道の一部リーグ復帰が嬉しい」との有難い言葉も頂戴しました(横井さんと小樽商大のつながりは、OB 会長佐藤貞直さんが三菱グループのラグビーでご縁があり、私と同期である中島文雄君が横井さんの小樽の現役への

指導の際に同行し、その中島君が大阪に転勤後にさらに親交が深まったものです。O Bとしてこの紙面を借りてお二人のご尽力に感謝）。

横井さんに昨年12月の8大学ラグビー部O B会の講演会で講師の日本代表ヘッドコーチ、ジョン・カーワンが「1968年の日本代表が対オールブラックスジュニア戦で横井さんらが実践したシャローデフェンスがもたらした勝利を高く評価し、これこそ日本人の優位性を生かした戦術である」と話していたとお伝えすると、「カーワンは日本代表選手に新渡戸稻造の『武士道』の精神を求めていたが、今の若者に“義”“勇”“仁”といつても分かる筈がない」と、グラウンドで現代の若者と直に触れ、その心を知悉した横井さんらしい尤もな言葉が返っていました。

私にとっても、1968年は北海道の田舎の高校で大宅歩（＊）の遺稿集『詩と反逆と死』を読んで感動し、ルールも知らず、プレーもわからず初めてラグビーボールに触れた年で、『武士道』も三島由紀夫の『葉隠入門』も読みましたが全くラグビーを始める動機にはなりませんでした。現に三島の本を読み返すと、『葉隠』の著者山本常長が江戸中期の武家の若者の姿を見て武士道の衰退を嘆くのを引用しながら、当時の日本の若者に慨嘆しています。

今年5月下旬には、小樽の現役が再び横井さんの指導を受けます。私自身これまで横井さんがグランドで実際に指導したのを拝見する機会はなかったのですが、今回は是非小樽に駆けつけその指導を拝見し、どう現役のラガーとコミュニケーションをとられているのかを観察させて頂き、あわよくば横井語録を記録したいと思っております。

*評論家大宅映子の兄（評論家大宅壯一の長男）で、日比谷高校ラグビー部のキャプテンを務め、ラグビーの試合中に受傷、その後遺症により33歳の若さで亡くなる。存命であれば77歳の喜寿。

最後に、大宅歩の著書の中に亡くなる33歳の時に書かれた詩の一節をご紹介します。

運命はラグビーの球のようだ
どうはずむかわからない

人間はそれに対してまったく無力だ
レフリーがスクラムといえばそれに従わねばならぬ
はるか五十ヤードむこうのレフリーに
アドヴァンティージというルールさえあるのに
だが何故にラグビーの球は
丸くなく橿円なのだろうか
審判の権限を一人にしぶったのだろうか
歴史の不思議な運命の辿る路はここにある
私はラガーである、スポーツマンである。
たとえ下手糞であったにしても、
いや下手だから少々なりとも理解できるのかも知れない。
脚が前に出なくとも、選手になれなくとも

走る楽しみ

九州大学 1972 年卒 久野 哲

マラソンを走るきっかけになったのは、2001 年の 9.11 同時多発テロがきっかけだ。テロでハワイ旅行までが敬遠され、当時いた会社がスポンサーの一つとなっているホノルルマラソン参加者が例年の半分強となり、急遽格安ツアーが設定され、社内外に参加者を募ったときである。それまで、休みの日に自宅近くを数キロ走る程度の単なるジョギング好きの休日ランナーだった。ただ、何時かは一度 42.195 キロを走ってみたいという漠然とした夢は持っていた。2 泊 4 日 4 万円という格安ツアーに魅せられ、ホノルルは冬のバーゲンセールがあると妻を納得させ、急遽参加を決めたのが出発 1 ヶ月前であった。それから付け焼刃の練習、それも土日プラス 1 日程度、1 回に約 10 キロを 1 時間で走るという程度の練習量であった。1 週間前一念発起して 40 キロ走ろうと頑張ったが、25 キロでダウンという有様であった。

スタートは朝 5 時、まだ暗くさすがのハワイも肌寒い季節であった。走り出すまでビニール袋をポンチョ風に頭と手を出してかぶり寒さと雨をしのいだ。スタートの号砲とともに花火が打ち上げられ、早朝のホノルルはお祭りのような騒ぎとなった。スタートラインに届くまで 10 分ぐらいかかりビニール袋を脱ぎ捨て走り出す。10 キロ地点予定通りの走り、ハーフ地点これもちょっと遅れたが練習と同じスピードで快調であった。18 キロ過ぎから 6 キロ強の直線となる高速道路に入いる。遠くまで見えなかなか距離感がつかめず単調な走路で疲れが増す。高速道路を降りると高級住宅街で応援も多く、応援に応えようという気持ちで頑張ることができる。折り返し 28 キロから 35 キロ過ぎまで、また高速道路の直線、単調な走路にも増して、30 キロを過ぎると人間の身体は変調をきたす。32 キロぐらいから筋肉痛と足が攣り始める。距離表示がある毎に立ち止まり屈伸運動をして攣った筋肉を伸ばし再度走り始めようとするが、走ることが出来ない。ただ、前に進ま

ければならない。必死になって歩く。どんどん追い抜かれていく。しかし、走ることが出来ない。しかも目の前には38キロ過ぎからダイヤモンドヘッドの急坂が迫る。必死に歩く。坂を下るとゴールとなる公園の入り口、そこからは最後の力を振り絞り走るが、スピードは歩く速さとほとんど変わらない。やっとの思いでたどり着いた42.195キロのゴール。時間は4時間32分であった。マラソンの42.195キロは人間の走る距離ではない、人間の体力の限界を超えていた、というのが私の結論であった。

それからはまた、普通の休日ジョガーに戻った。次の年は走らなかった。ところが、この私の走りが7歳年上の兄に影響した。兄はその翌年定年を迎える、何を思ったか、70歳までホノルルマラソンを「歩く」といいだし参加し始めた。

そして、2004年からまた私もホノルルを「走る」ようになった。兄の歩くスピードはだんだん速くなり、私の走りはだんだん遅くなり、なんと昨年は同じ5時間台、もちろん50分近くの差はあるものの、「何でお前は走るのだ、時間は変わらないのに」といわれている。

私も今年還暦、既に赤いランニングウェアを貰っている。来年から私も兄と同じように70歳までは走り続けたいと思っている。

O B 会活動と現役支援

帯広畜産大学
緑白クラブ

帯広畜産大学ラグビー部の創部は1941年で、この大学(当時は帯広高等獸医学校)が創立された時期に発足しています。大学の創立目的は陸軍の貴重な輸送手段であった馬の健康管理であり、正しく軍隊そのものでした。この時代に敵のスポーツであるラグビーの創部をよく認めたと思います。そして2011年には70周年になり、さらに飛躍することが期待されています。

O B 会がいつから活動し始めたかは定かではありませんが、1962年から「緑白」が発行されてO Bと現役を結ぶ冊子としてO Bに配布されるようになりました。数えて今年は47号まで続けることができました。この間2回ほど合併号を発行せざるを得なかった時期がありますが、脈々と、O Bと現役の絆がしっかりと存在しています。

緑白は現役マネジャーが企画立案・記事集めから編集まで自主的にやってくれています。企画から完成まで4ヶ月はかかります。今年は156ページの大作になり、背表紙まで付いていました。思えば創刊当初はガリ版刷りで20ページほどでした。1枚1枚原紙に鉄筆で書き、口 - ラーで印刷。手にいっぱいインクが付き困りに困った。

8大学でO B会活動や会費の調査をしていただいた結果を見せていただくと、調査対象の大学はいずれも会費の徴収に相当の努力をしている様子が良く分かります。この傾向は帯広においても同様であり、O B会の活動財源がどうしても制約されます。しかし、限られた財源で現役を支援し、O B間の情報提供は進めています。積み重ねて行くことによってO Bがつながり、現役がより良きラグビー人生を送ることができます。このような活動が少しでもラグビー以外の関係者にも伝わることによって、さらにラグビーを理解していただける方の増やし、より底辺の拡大につながります。

今年の現役は残念なことに北海道地区の2部で試合をすることになり、奮

起を誓い合っています。強化のために横井様に臨時コーチをお願いすることを決定し、横井様のご了解を得ています。これは8大学のつながりの賜物であり、関係者に感謝をしています。

また、最近入った情報によりますと、5月か6月に早稲田大学が函館に遠征に来るそうです。その時に一部の部員を帯広に招待して交流試合も検討されています。帯広畜産大学の緑のグランドで十勝のラガーとともに試合や練習が出来ることを切に願っています。

これを契機に少しでも上を目指し、ラグビーの楽しさを広めて行きます。

八大学ラグビーのいいところ

名古屋大学 平成十二年卒業 壱岐 一也

この寄稿を頼まれて、何を書こうかといろいろと思い巡らしてみたが、この八大学ラグビー親善大会の最大の魅力である親密な、家族的ともいえる雰囲気について少し書かせてもらおうと思う。

この雰囲気を作り上げている要素はいくつもあるだろうが、ひとつには勝利至上主義でないことが挙げられるかと思う。これまで学生、クラブとラグビーを続けてきたが、勝ち負け、優劣というものが常につきまとっていた。もちろん、試合になれば必死になる。各大学の誇りを胸に、懐かしい緊張感を味わいながら、鈍った体をフル回転させて死に物狂いに競い合う。しかし、負けたとしても、その悔しさは心地いいくらいで、来年は勝ちますよと前向きになれるし、勝った方もいつでも挑戦してきなさいとふんぞり返って答え、両者を隔てる壁のようなものは一切存在しない。その背景には互いへの尊敬の念があるものと思う。この極めて激しく危険甚だしいラグビー、これをやってきたということだけで互いを尊敬するには十分である。

他の点としては様々な年齢層が入り混じっていることがあるかと思う。若手ばかりではおもしろくない。また、年配の方だけでもきっと同じだろう。若手の部類に入る自分からは、年配の大先輩たちが走って転んで、酒を飲んで熱く語る姿が非常に痛快で、それがあってこそ大学間の交流、年代間の交流が活発になると思っている。若手の中にも酒飲みや暴れん坊はいるが、それをさらに大酒飲みの大先輩が一喝するという図は最高だ。ちょっと話が逸れてしまったが、この年代構成は本当に魅力的で、大先輩方には是非、生涯現役で走り続けてもらいたいと思う。

学生、社会人、クラブとラグビーをするステージはいろいろあるが、勝つことばかりに固執せず、このような調和の中で競い合うというのもいい。調和なんて言葉はなかなかこの世の中に出でこない。それを教えてくれるのがこの八大学ラグビーで、このような大会はいつまでも在りつづけてほしいし、もっと大切にしていきたいと思う。この大会を作り上げてきた皆さんのはじめの努力と情熱には自然と頭が下がる。そういう思いもあり、この寄稿くらいならば引き受けようという気になった。それぞれが少しづつ役割を分担し、助け合うことで、この家族的で、尊敬する者同士が競い合える大会がさらに発展し、盛り上がっていくことを心から祈っている。

以上

八大学参加 10 周年を過ごして

長崎大学 昭和 45 年卒 伊藤 正

長崎大学は、平成 11 年大会（1999 年）に名古屋大学と一緒に参加させて頂いてからこの第 20 回大会で、丁度 10 周年目되었습니다。

この間の参加者及び試合結果をまとめると、次の表の通りです。参加者は述べ 278 名。秩父宮ラグビー場での大会には通常より多くの O B が集まってくれ、特に第 20 回記念秩父宮大会へは海外赴任者や九州など遠方からも集まってくれました。このため、ほとんどの大会で当校単独チームとして試合ができました。戦績は、残念ながら、2 勝 7 敗 1 分です。

大会回数	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
会場	NTT千葉	NTT千葉	NTT千葉	NTT千葉	NTT千葉	秩父宮	海洋大	海洋大	海洋大	秩父宮
参加者数：合計 278 名										
長崎大	21	15	23	28	23	33	36	29	27	43
試合結果：2 勝 7 敗 1 分け										
長崎大	○	×	△	×	×	×	○	×	×	×
得点	19	5	10	22	14	10	14	0	5	5
得点	17	14	10	27	48	19	5	7	17	38
相手校	小樽	帯畜	海洋	海+名	北大	東北	海洋	海洋	九大	海洋

私は八大学幹事会に参加してそろそろ 10 年目を迎えています。幹事会は 1 月と 8 月を除き年に 10 回、毎月第 2 水曜日に開催されます。春の大会と冬の講演会・忘年会の計画立案を行い、八校が持ち回りでこれらの計画・運営を担当しますが、担当校が孤立無援でやる訳ではなく、各校ができる調査・提案・支援などを行います。無理なく継続できるよう皆が協力する訳です。幹事会での会議進行に用いられるツールも日進月歩です。H20 年度担当の帯広畜産大は、PC から OHP 投影でその場で画像紹介や討議内容を記録して行くペーパーレス手法を用い始めました。第 20 回記念秩父宮大会の動画映像は、小樽商科大の酒井さんがご自分で、スチール写真集と合わせ約 400 枚（約 200 組）の DVD コピーを作成して下さいました。貴重な映像記録を大変廉価な価格で皆様が入手できたことに、改めて厚く御礼申し上げます。

H21 年度大会は名古屋大が幹事校で名古屋の瑞穂ラグビー場で開催され、
H22 年度大会は東京海洋大越中島グラウンドでの大会を長崎が担当します。

初め、O B 会はかくの通りですが、現役の現状と言えば私たちの頃と比べて大きく変っています。平成 16 年の国立大学の法人化で、本業の教育・研究は確かに施策の比重が高くなり良くはなっているようですが、一方の若者の基礎的生活力育成に有用なクラブ活動(特に体育系)がかなり疎かになっています。大学関係者の口からも、今の学生は授業やゼミには実に真面目に出席はするが、確かにクラブ活動は低迷している、クラブ活動の低迷は大学や学生の将来にも好ましくないのだが、との話が聞かれます。当時と大きく変わった就職活動も大きく影響があるのでしょうが。

私たちの後輩にも大変強くなった時期がありますが、私たちの時は勝敗は芳しくありませんでしたが、学業やアルバイトと一緒に何とか練習はきちんと続けました。これらを両立するように一生懸命に努力したという記憶が、将来の人生に必ずや自信となって良い影響を与えるのです。今現役の学生からもこれらの再生に悩み努力を図っているようですが伝わってきますが、同時に大学側にもこれらの復活を支援する必要を理解する言葉が聞かれます。「文武両道」、いかなる形であれこれの実践努力は将来に必ず良い結果をもたらすと考えますので、O B 諸氏間の懇親とともに、現役学生の中でのこの「日々努力」の気持ちが伝統として伝わらんことを祈る次第です。

O B 会は、何と言っても現役の存在が大前提であり、繋がる現役あっての O B 会です。下記に、我々よりも遙か前に、困難な中で目標を見据えて、自らの向上を図った大先輩方の歴史を記し、我々 O B も現役と同じラグビーをやったという土壤にたって現役の活動と O B 会の発展を育み、現役から O B 会までの老若が同じ連携のもと、豊かな人生を過ごせることを祈ります。
(以下転載記事)

=====

「西陵ラガー青春譜・60 年のあゆみ」より創部七年目に花園出場を果たす昭和五年から七年（24 頁～26 頁）を抜粋

【昭和五年】

昭和五年は、長崎港駅が開業し、日華連絡船と直結、上海航路は便利になった。しかし、いわゆる“昭和恐慌”の時代で「大学は出たけれど」という流行語が生まれた。

この世相の中で、幹事・主将の鈴木辰蔵（24 回・沼津商業卒）はチーム強化のための三年計画を立てた。考えたのが、優秀新人のスカウトである。受験生の身体検査場に目をつけた鈴木は、検査場の廊下に立って、受験生の体格を入念にマークしておいて入部を勧誘する。こうして集まった新入生が二十六回生である。

かく陣容を揃えたこの年のチームは、一層強化練習に励んだ。しかし、試合の記録は少ない。わずかに、全国高専大会九州予選で、一回戦に七高と当たり、9-9 の引き分け、抽選で敗退する。得点は三つのペナルティーゴールであり、キッカーは小川滋であった、としかない。

しかし二年後、この年の新入生が三年生の時、高商ラグビーは、一つの頂点に立つのである。練習自体、無計画な、なまやさしいものではなかったはずがない。勝呂教授愛用のパテーベビーが、遺憾なくその真価を発揮したであろう。

【昭和六年】

九月十八日、満州事変勃発。後に続く長い動乱の時代への曲がり角である。

この年、不思議に高商ラグビー部の動きを伝える記録がない。対外試合を妨げる事情は何もなく、チーム力も、前年大量の優秀新人を迎えて、三年計画の二年目に当たるこの年、練習にも試合にも、例年になく充実したものがあったはずである。

ただ、寺田福夫（25 回・広島商業卒）が、長崎に入港したイギリス海軍との試合があったこと、彼らが高商グラウンドのすさまじさに驚いたこと、試合中の彼らの体臭にしりごみしたこと、などを寄せている。高商ラグビーの国際化は、早くも実際的であった、とでもいべきか。

【昭和七年】

三年計画の最終年である。二十六回生は確かに猛者揃いであった。その素質に加えて、計画的な強化策に育てられて、いま、最上級生である。

八月、明大OB三宅氏コーチのもとに、夏期強化合宿が門鉄グラウンドで行われた。早朝から午後はボールが見えなくなるまで、猛練習が続く。忍従、苦闘、束縛の世界であったが、いま、その苦しさを言う者はいない。

この年、彼らは創部七年にして、九州、台湾の高専十数校の頂点に立ち、全国大会花園出場の栄誉を手にしたのである。過去、今一步のところで、九州を制し得なかった先輩の悲願を達成したのである。

夏期合宿が明けた九月中旬、薬専チームと対戦、31-3 でこれを破り幸先良いスタートを切った。このあと、長崎医大グラウンドにおいて、前年の九州高専大会の覇者、西南学院を 22-0 の葬って自信を得た。西南学院は九州学生ナンバーワンを自他ともに許していたチームである。

十一月、さらに二週間の合宿を行い、万全を期して二十日からの全国高専ラグビー大会九州予選専門学校予選に出場した。一回戦・大分高商を 42-3 の大差で破り、二回戦・明治専門を 39-3 で一蹴、決勝戦・九州医専を 8-3 で退けて、専門学校八校の代表となる。

十二月四日、高等学校代表、五高と顔を合わせる。雨中の激戦となつたが、9-0 でこれを葬り、九州高専の覇権を握り、優勝盾は丹主将に手渡された。花園での全国大会出場まであと一勝である。

予選最後の相手は台湾代表、台北高商であった。十二月三十日、両チームのファイトは、春日原グラウンドに火花を散らした。長崎高商は、前後半とも、完全に相手を圧倒、52-3 のスコアで完勝、全国大会への切符を掌中にした。

花園における長崎高商は、その意気、その力、ともに大会前、関係者の注目するところであったが、初戦強敵、関学と対戦、その堅陣をわずかに抜き得ず、11-14 の逆転を許して涙をのむ。

昭和二年、先輩石光らによってまかれた高商ラグビーの小さな種子が、ここにひとつ、見事に花咲いたのである。事実、時代の変転はあってもこの快挙は戦後昭和二十七年、新制の長崎大学が再び達成するまで、生まれない記録である。この栄誉を担った 26 回生の半ばは既に亡い。

今この時、病床にある阿部武道（26回・福岡中学卒）、田中六三郎（26回・門司中学卒）は、闘病の中にも、この思い出だけは消えることがない。

“春愁や嘗てラガー脚細り” 月子（阿部武道夫人）

栄誉の陰に、黙々と、ともに練習に励んだ部員達も忘れ得ないが、大会に出場した選手の名を、ここにとどめておこう。

F W 笹尾高樹（26）藤井弘二（27）久保山一郎（28）

有馬正人（26）中村福三郎（27）阿部武道（26）

田子 健（26）中田武夫（26）

H B 小島 薫（26）田中誠治（27）

T B 田中六三郎（26）丹正治（26）野中幸吉（26）

大神 誠（26）

F B 久徳庸夫（26）

やはり、あの夏

（65頁から記事一部を抜粋）

28回 原田真三

当時を想起しますと、やはり、夏期合宿（門鉄大里・門鉄グラウンド）の猛練習が最も強く印象に残っています。

一日三〇〇回のスクラム

一発で倒すタックル

忠実なフォロー

など、昔も今も変わらないようです。

現役各位のご健闘を切に祈ります。

[転載記事を通じて、(26)は高商26回卒業生（昭和8年卒業）、他同様に読む]

編集後記

昭和 46 年 九大卒 丸田 堅次

第 20 回の八大学 O B ラグビー大会は盛りだくさんの企画、魅力的なイベントで多数の参加がありました。今回は幹事校の帯広畜産大の皆さんのがんばりと緻密な準備でみごとな 1 年間であったと思います。更に、独断専行型の大会ではなく、他の 7 大学の協力が花開いたところが随所に見られました。

原稿についても期限内に全ての投稿がスムースに集まってきたしました。また、今までの「菱」では触れられていなかった O B 会費の点についても明確になりました。九大の久野君の努力には頭が下がります。九大 O B 会のニーズでもあったのですが小樽商科大さんの「後援会北海道支部の設立」の投稿にも現役を経済的に応援するという熱意が感じられました。

今回の特徴として、高性能なデジカメの普及に伴い、皆様から幾多の画像情報が投稿されました。完成版のデータ量が 2005 年、2006 年が 2 M B 、 2007 年が 6.6 M B 、 2008 年が 7 M B を超えました。画像情報とあわせて充実した「菱」が続していくことを願っています。

5 月 9 日(土)に皆様が初めての企画の瑞穂ラグビー場の大会に多数参加され、ご活躍されることを祈念しております。

2009/04/23